【第六九回研究例会〈怪異〉の聞き方・書き取り方―〈口承〉研究の視点から】

本例会の総括

今井　秀和

本例会においては、〈怪異〉をいかに聞き取り、書き取ってきたかという、不可思議かつ不確かな知識をめぐる情報収集および記録の問題について考えることとなった。しかしながら、そこには、三名の報告者が共通して扱った怪談ないし怪異を、同じ枠組みで考えてよいのかどうか、という問題が内在してもいた。

各報告が取り扱った時代やメディア、社会背景を異にした怪談や怪異は、おのずからその位相を違えており、本例会は、〈怪異〉の措定という、極めて困難な試みの必要性を浮上させることともなったのである。はたして、本例会で考えようとしていた〈怪異〉とは何であったのか。総括として、例会終了現在での考えをまとめておきたい。

まず、一柳の報告が扱ったのは、近代の新聞記事における「怪談」であった。その背景には明治期に特有の怪異観が横たわっているものの、分析の対象はあくまで、新聞に記録された「怪談」だった。また、大島の報告が扱ったのも、近代から現代にかけての「学校の怪談」や「都市伝説」という、記録された「怪談」であった。これらは現代においてリアルタイムに収集されたものや、近代の記憶を現代において記録したものである。

このように、一柳や大島が分析の俎上に乗せた事例に関しては、怪なるモノゴトに関する談、すなわち「物語」という整理が可能である。あくまでそれは、物語としての対象化が可能なものであった。ところが、以上二つの報告が分析の対象としていた怪談が扱っている恐ろしいことや不思議なこと、すなわち〈怪異〉とは何か、という問いは、いささか複雑な問題である。

なおかつ今井による報告は、いわゆる「怪談」を扱ったものではなかった。それは、江戸後期の生まれ変わりをめぐる世間話に対する、同時代的な反応の差違について考えたものであった。では、江戸期における生まれ変わりは〈怪異〉と呼ぶべきものだったのか。以下、先行研究を補助線としつつ、再考していく。

小松和彦は「妖怪」の概念を、①出来事としての妖怪（現象―妖怪）、②超自然的存在としての妖怪（存在―妖怪）、③造形化された妖怪（造形―妖怪）の三段階の意味領域に分けた（『妖怪文化入門』参照）。本例会で考えようとしたのは、「現象―妖怪」に重なる意味合いでの〈怪異〉であった。

一方、日本史学をベースとする東アジア怪異学会は、史料に含まれる「怪異」の把握に際して、発会当初に西山克が提起した以下の三類型を承け継いでいる。①昔、「怪異」とされていて

今でも怪異と思えるもの、②「怪異」とされていないが昔の人も怪しいと感じたもの、③昔の人はそう考えていないが今の我々から見ると怪しい、怪異ではないのかと思うもの（『怪異学入門』参照）。以上の三類型には、古記録に「怪異」と記されていたか否かという問題意識や、時代によって異なる常識の問題が包含されている。

さて、現代において、前近代の霊験・怪異・妖怪・俗信などが考察の対象となる場合、かつては広くそれらが信じられていた、という大雑把な語り方を為されてしまうことが多い。学術的な研究ではない、一般層が手にする書物などにおいて、それはとくに顕著である。

ところが、たとえば勝五郎の転生などの特定の事例に関して、様々な立場で記された諸資料を通覧したとき、そのような通り一遍の解釈には、ある種の危険性が含まれていることが分かってくる。すなわち、時代の変化や地域的な差異、あるいは身分・職業などによる社会的な階層の差違だけでなく、たとえそれらを共有する者どうしであっても、個々の認識において、勝五郎の転生は多様な捉えられ方をしていたという事実が浮上してくるのである。

そこには、ある人にとっての怪異が、別の誰かにとっては怪異ではない、という単純かつ根深い問題も横たわっている。今井の報告論文中でも触れたように、現代人の認識においても、生まれ変わりを「物語」として捉える姿勢のほかに、実際に起きている「事実」として理解する姿勢もある。ここで再び、――生まれ変わりは怪異なのか否か――。

おそらくは、対象となるテーマについて考えている今現在の時間軸において、論じる者が（研究に向かう姿勢として）それを合理的に説明可能な事実として捉えていない場合、〈怪異〉というラベリングが必要となってくる。つまり怪異とは、研究者自身の思考を逆照射する概念でもある。

それは、飯倉義之が「妖怪のリアリティを生きる―複数のリアリティに〈憑かれる〉研究の可能性―」で提示したような、一人の研究者の、フィールドにおける振る舞いと研究上の姿勢との齟齬を自覚的に内面化していく方法論とも呼応してこよう（『現代民俗学研究』第七号、現代民俗学会、二〇一五年三月）。本例会を通して再浮上した〈怪異〉をめぐる問題については、今後も継続して考えていくこととしたい。

（いまい・ひでかず／国際日本文化研究センター）